

中学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

教育課題

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿（教育課題）

分科 会名	区市町 村 名	学 校 名	氏 名
進路 指導 分科 会	墨田区	曳舟中学校	和田康宏
	品川区	八潮中学校	米塚裕貴
	杉並区	東原中学校	木積一博
	北区	豊島北中学校	◎ 荒川哲男
	練馬区	田柄中学校	田中清隆
	足立区	第十中学校	藤森重臣
	葛飾区	青戸中学校	近江貞之
	江戸川区	西葛西中学校	島袋恒男
	日野市	日野第一中学校	山田智之
	稲城市	稲城第五中学校	瀬戸紀男
生活 指導 分科 会	江東区	亀戸中学校	益子博英
	世田谷区	松沢中学校	脇田禎彦
	中野区	第三中学校	荒 銳二
	板橋区	西台中学校	町田喜久男
	八王子市	別所中学校	○ 原 徹
	調布市	第三中学校	小山政弘
	国立市	国立第二中学校	山崎 章
	東久留米市	大門中学校	清水 実
	武蔵村山市	第一中学校	正留久巳
	秋川市	西 中 学 校	神崎康雄

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 加藤良則
多摩教育事務所指導課指導主事 原 雅夫

目 次

I	研究主題及び主題設定の理由	2
II	進路指導分科会の研究 「生涯学習社会に向けて、生徒一人一人の主体性と個性を生かす進路指導の在り方」	3
1	副主題設定の理由	3
2	研究の方法	3
3	研究の構造	4
4	研究の内容	5
(1)	アンケートの結果と分析	5
(2)	実践その1	7
(3)	実践その2	9
5	研究のまとめと今後の課題	13
III	生活指導分科会の研究 「自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒の育成」	14
1	副主題設定の理由	14
2	研究の方法	14
3	研究の構造	15
4	研究の内容	16
(1)	生徒の実態調査	16
(2)	具体的な実践例	17
5	研究のまとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

今日、子供たちを取り巻く環境は大きく変化している。科学技術の進歩や情報化の進展は、ものの豊かさや便利さをもたらしたが、人々の心の豊かさを失わせているという指摘がある。また、都市化が進んだ地域社会では、地域での助け合いや異年齢の子供たちの遊びが減少し、人間関係の希薄化が進んでいると言われる。さらに、少子化や核家族化が著しく進展している家庭では、子供に対する過保護や過干渉の傾向をますます強め、子供たちに意欲や成就感を体得させる機会を奪ってしまっているとも言われている。

このような環境の中で育てられた子供たちの多くは、自主性や主体性に乏しく、物事に対して消極的になってきている。また、困難に耐えてそれを克服しようとしたり、新しい課題に創造力を働かせながら挑戦したりすることも、容易にできなくなっている。

これからも激しく変化する社会に生きていく子供たちにとって、社会の変化に主体的に対応できる能力や創造力を身に付けることは、ますます重要になってきている。とりわけ、思考力、判断力、表現力などの能力や、創造性の基礎となる直感力などは、子供たちが生涯を通じて学び続け、たくましく生き抜いていくための基盤となる力である。

そのため、学校教育においては、基礎的・基本的な内容を重視し、一人一人の個性・適性を生かす教育の充実を図ることが重要である。特に中学校段階の生徒は、心身両面にわたる発達が著しく、自己の生き方についての関心が高まる時期にある。生徒のこのような発達段階を考慮しながら、一人一人の生徒が主体的に自己の特性についての理解を深めるよう指導・援助していくことは、極めて大切である。また、一人一人の生徒の人格の価値を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力が高まるよう指導・援助していくことも必要である。そのためには、学校生活がすべての生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指さなければならない。

以上のような背景や状況を踏まえ、「生徒一人一人の個性・適性を生かし、主体的に生きる力を育てる指導の工夫」という本主題を設定した。

教育課題部会では、進路指導分科会と生活指導分科会とに分かれ、それぞれの視点から生徒の主体的な活動を考察し、体験的学習に主眼を置いた研究実践に取り組んだ。

進路指導分科会では、職場体験や職業人との交流について研究実践を行い、生活指導分科会では、各教科や特別活動の具体的な実践を通して研究に取り組んだ。

II 進路指導分科会の研究

進路指導分科会副主題

生徒一人一人の主体性と個性を生かす進路指導の在り方

1 副主題設定の理由

「1年生で身近な職業調べ、2年生で職場訪問、3年生で上級学校訪問」というように進路指導における体験活動はある程度の広がりや定着を見せているものの生徒の進路に対する意識の高まりは、私たち教師が期待するほどには至っていない現実がある。また、生徒の実態として、「自分の進路に無関心」「高校には行きたいが勉強はしたくない」「過程より結果を重視する」「何事につけても指示待ち」などという指摘もある。

21世紀は社会の変化が激しく、学校で学んだ知識だけでは対応できないと考えられている。そのため、これからの学校教育においては「自分から学ぼうとする意欲」「問題解決のための思考力や判断力」「自分を表現できる力」などが求められている。こうした要請に対して、教科においては指導と評価の工夫に向けての取組みが進められている。また、進路指導でも「生き方」の指導が重視されている。各学校・学年で啓発的な体験活動が実践されてきたが、生徒自身の生き方には結びついていない状況がある。その理由としては、①体験活動が単なる行事に終始している、②3年生の進路指導が出口指導に陥ってしまっている、などが考えられる。

こうした現実を踏まえ、これまでの体験活動の不十分な点を改善する方向として「個に応じた実体験活動」を行うことで「将来の進路に視野を広げられる生徒」「進路に対して主体的に考える生徒」「進路を考える上で自らの個性を生かそうとする生徒」が育つと考え、上記の副主題を設定した。

2 研究の方法

副主題に迫るために、私たちは体験活動の工夫・改善の視点を「生徒の主体性と個性」を生かすことにあて、職場体験と職業人との交流会2つの実践に取り組んだ。

本分科会では、次のような点に重点を置き研究を進めた。

- (1) 生徒の興味・関心のある職業を「予備調査」で把握する。
- (2) 生徒の希望が生かされるよう事前アンケートを工夫する。
- (3) 教科や特別活動と関連させた事前・事後の指導を工夫する。
- (4) 受け身ではなく、実際に体験したり、質問事項を考えさせるように工夫する。
- (5) 体験活動後に生徒の意識調査を実施して指導の工夫がどのように生かされたのか、分析・考察を行う。

3 研究の構造

副主題 生徒一人一人の主体性と個性を生かす進路指導のあり方

||

目指す生徒像

- 将来の進路に視野を広げられる生徒
- 進路に対して主体的に考える生徒
- 進路を考える上で自らの個性を生かそうとする生徒

↑

具体的実践

- 職場体験
 - ・教科（美術）との関連を図る。
 - ・個々の生徒の希望を尊重し、訪問先を決める。
 - ・実際に職業を体験させる。
- 職業人との交流会
 - ・事前のアンケートを参考に、職業人を招き、話を聞く。
 - ・受身の話だけでなく、ディスカッションを取り入れる。
 - ・学校行事・学年行事との関連を図る。

↑

工夫・改善の視点

- 他の教育活動とのかかわりを工夫する。
- 可能な限り生徒の選択の幅を広げ、希望、意見を尊重する。
- 生徒の個性や適性に応じられるようにする。

↑

仮説 「個に応じた体験活動を行うことによって、主体的に生きる生徒が育つ。」

↑

実態と課題

- 進路を考える上で、目先のことにとらわれすぎている。
- 自ら進んで、進路を真剣に考えようとししない。
- 自己の個性を生かした進路選択ができない。

4 研究の内容

(1) アンケートの結果と分析

本分科会では職業体験学習を計画するに当たり、今の生徒の興味・関心ある職業を把握し、関心ある職業を通して学習することで、生徒がより興味を持って職場体験学習に臨むとともに、自分の将来についても考えることができるのではないかと考えた。

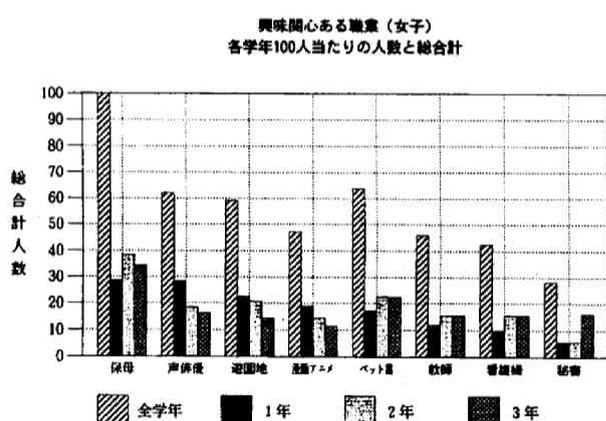
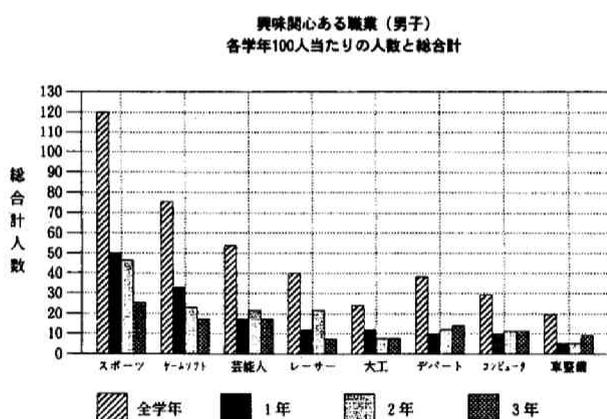
まず、予備調査として「中学生の興味・関心のある職業」を調べるために、120種の職業を示し、その中から、一人が5種の職業を選択するという方法でアンケートを行なった。またそれ以外の職種があるものについては、その名称を記入させた。下記にその分析結果を示す。

<興味・関心ある職業の内容>

男女とも「華やかさ、カッコよさ、目立ち、専門職、自分の興味が生かせる。」といったものが選ばれている。また、中学生の職業に対する関心は混沌とした現代社会を反映し、職種も第3次産業に偏り、カタカナ名のもも多い。親からの期待と察せられるものがあるほか、テレビや雑誌などのメディアからの情報と思われるものが非常に多い。そして、興味・関心は個人によって大きく異なっている。

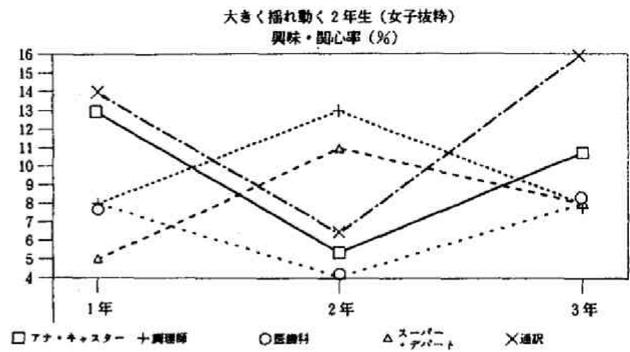
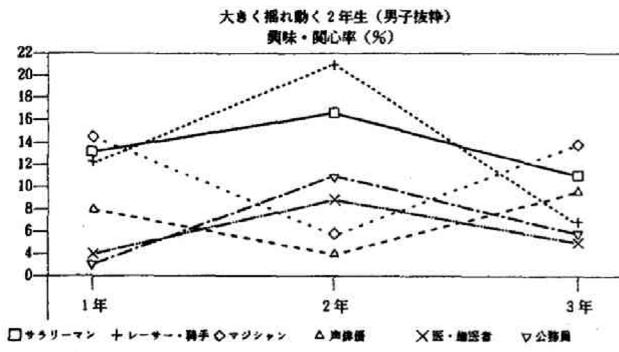
<男女の特徴>

女子は比較的早い時期からかなり自己理解が進んでおり、興味・関心ある職業は現実的である。将来的にみても自立できる職業、花や動物と触れる職業、漫画・アニメ・遊技場などロマンチックさの残るもの、芸術的なものなど多彩である。それに比べ男子は、スポーツ選手、ゲームソフト制作者、芸能人、レーサー、騎手といった、自分の将来を考えたというより、憧れや興味、趣味の延長的なものが多い。1・2年生では、近年のサッカーブームに相まってスポーツ選手への関心は高い。また、芸能界への願望は高く、テレビ等メディアの影響の大きさに驚かされる。



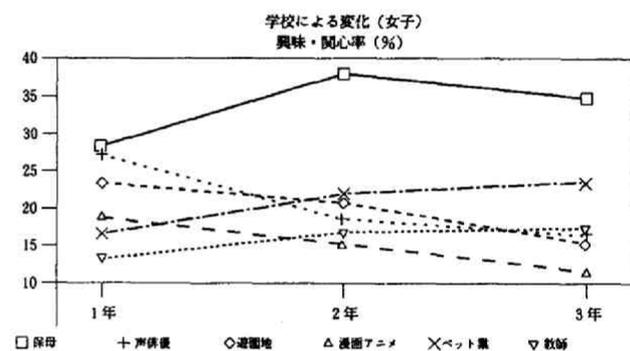
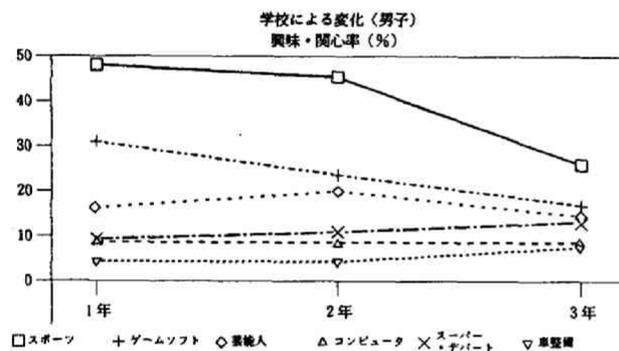
<2学年の特徴>

2年生の男子に見られる特徴として、サラリーマンや公務員が増えており、現実を考えるようになったと思える。また、芸能人やレーサーや騎手といった憧れの要素の強い職業に興味が増すかと思う反面、声優・俳優が減っている。このように、憧れや興味と現実の職業との間で大きく迷っている様子が見られる。女子では、通訳、アナウンサー、医師、調理師等の職業に就きたいという傾向があらわれるが、いずれも現実的である。



<学年による変化>

男女共に学年が進むにつれて現実的になってくる。女子は、順位に変動があるものの大きな変化はみられない。男子の場合は、3年生になるとスポーツ選手・ゲームソフト制作者が激減し、現実的な職業が増加する。また、興味・関心ある職業の種類も学年が進むにつれて多くなり、同時に1つの職業を占める割合も小さくなっている。



<アンケートからみた職業の分類>

アンケートの結果から、中学生の興味・関心ある職業は次の4つに分類することができた。

- A 自分の趣味や興味を最大限仕事に生かせるもの
 ペット業 花屋 カメラマン 通訳 ゲームソフト制作者 インストラクター
 ツアーコンダクター
- B 専門的な技術や特殊な才能を必要とするもの
 スポーツ選手 コンピュータ技術者 エンジニア 俳優声優 アナウンサー 演奏家
- C 資格や免許の入る職業
 保母 教師 美容理容師 医者 薬剤師 看護婦 自動車整備士 調理師
- D 社会や人の役にたつ職業
 国家地方公務員 警察官 消防士 駅員

(2) 実践その1 職場体験の実践(第1学年)

ア 目的

(ア) 働く人との交流や職場での実体験を通して、職業に対する理解を深めるとともに、働くことの厳しさや喜び、働くことの意義を学び、自らの意欲的な生き方を探る。

(イ) 職場体験を通じて、人と人との生きたマナーやエチケットを学ぶ。

(ウ) 職場体験を通じて、主体的に進路を選択する能力を高める。

イ 実施計画 (●教師の動き ○生徒の動き)

月	実 践 内 容
1 学期	○学級活動 「将来の夢や希望と進路の学習」「自分を知る」「職業と仕事」などについて学ぶ。
夏休み	○宿題 「美術科による身近な職業調べ」
9 月	○美術……宿題の発表会(作品展示含む) ●進路指導部・学年会にて職場体験の原案検討 ○学級活動 「アンケートによる意識調査」「働くことの意義」についての学習 「職場体験」の説明
10 月	○学級活動 「体験先希望調査」 ●事業所のリストアップ ●各事業所・施設に職場体験の依頼(口頭→文書) ○学級活動 体験先の検討及び決定→職場体験班の編成 ●体験先の一欄表作成 ○学級活動 各体験先の事前学習
11 月	●各事業所への経路・経費の確認 ○学級活動 各体験班で質問事項の検討 経路・経費の検討 「行動計画書」の作成 ○学年学活 職場体験の心構えと諸注意 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">職 場 体 験</p> <p>●出発指導→1, 本部(待機・受付)→下校指導 2, 巡回 ○5・6校時に実施 ○出発→訪問・体験→帰校→報告→下校</p> </div> ○学級活動 「報告書」「感想文」の作成 「アンケートによる意識調査」

12 月	<p>●事後指導（報告書のまとめ）</p> <p>○学級活動 生徒による礼状の作成 「報告書」のまとめ 「体験発表会」</p> <p>○学年集会 「体験報告会」</p>
---------	--------------------------------------------------------------------------------------

ウ 実践における具体的な工夫

(ア) 教科との関連について

職業に対する意識付けとして、美術科の夏休みの宿題（身近で働く人を描く）を利用して実施し、報告会も行った。

(イ) 体験先の選定について

可能な限り、地域との関連を密にして、個々の生徒の希望を尊重できるように、下記のような流れで行った。

＜選定までの流れ＞ 体験先希望調査→体験先の決定（訪問先一覧表の作成）

(ウ) 事業所・施設への依頼について

実体験をさせていただけるよう依頼した。（口頭と文書）

(エ) 体験班について

体験希望職種にて班を編成した。（原則として学級内で編成）

理由・・・可能な限り生徒の希望を優先するが、各事業所の体験者の希望人数（平均的に5～6人）に合わせて、体験班の人数がまちまちにならないように配慮した。

(オ) 質問事項について

○仕事の内容 ○資格と条件 ○仕事についての動機 ○仕事についての感想（よかったこと・残念だったこと）○中学時代の取り組みに対するアドバイス ○その他

(カ) 報告会などの事後指導について

各班からの報告書をまとめさせ、各学級と学年集会で発表した。

エ まとめ

職業に対するアンケート調査の結果からみると、職場体験前と後では、生徒たちは次のような変容をみせた。下記の(ア)～(カ)は、アンケート調査の結果である。

(ア) 興味が持てる仕事が自分に一番適していると思うので、自分が興味を持てる仕事を将来はしたいと考えている。 (体験前 45%→体験後 32%)

(イ) 好き嫌いに関係なく、自分の適性にあった仕事があると思うので、自分の適性にあった仕事をしたいと考えている。 (体験前 21%→体験後 33%)

(ウ) 自分の能力にあった仕事が、一番自分に適していると思うので、自分の能力にあった仕事をしたいと考えている。 (体験前 4%→体験後 2%)

(エ) 好き嫌いに関係なくなるべく収入の多い仕事をしたいと思う。 (体験前 7%→体験後 4%)

(オ) ある程度の社会的地位の得られる仕事につきたいと考えている。 (体験前 3%→体験後 1%)

- (カ) 大企業のような大きな組織の中で働くより、小さくても自分の能力が発揮できる仕事につきたいと思う。
(体験前 7%→体験後 12%)
- (キ) 自分自身のことよりも多くの人のためになる仕事につきたいと思う。
(体験前 7%→体験後 10%)
- (ク) 健康を害しては幸福はないと思うので、自分の健康を第一に考えて仕事につきたいと考えている。
(体験前 3%→体験後 3%)
- (ケ) 自分自身の夢や希望より、家庭を第一に考えた仕事につきたいと思う。
(体験前 3%→体験後 3%)

また、体験前は具体的な希望職種を持たない生徒が 56%と非常に多かったのに対して、体験後は 23%と減少傾向を示した。

次に、今後体験してみたい職業については、下記に示すようになった。

- (ア) 機械の製造、組立、修理などの仕事 (体験前 15%→体験後 16%)
- (イ) デザインなどの美術系の仕事 (体験前 13%→体験後 9%)
- (ウ) 販売業 (体験前 13%→体験後 18%)
- (エ) サービス業などの仕事 (体験前 11%→体験後 8%)

このような生徒の変容は、職業を実際に体験することによって、職業についての知識が深まり、希望が明確になった結果と考えることができる。例えば、

①「工業デザイン系」の仕事を希望していた生徒が、自分の希望する職業が「機械製造」の一分野であることに気がつき、そのため、体験してみたい職業が「デザインなど美術系の仕事」から「機械の製造・組立・修理などの仕事」に変わっていった。

②「身近な職業調べ」の時は、中小自動車整備工場の職業調べを行い、「職場体験」の時は大手自動車会社の販売営業所の職場体験した生徒では、「身近な職業調べ」直後には「自分は、絵を描くことが好きで、自動車関係の仕事にも興味をもっているので、自動車整備工場で働く人の絵を描きました。みんな忙しそうに手際よく働いている姿をみて、仕事をするのは大変なことだと思いました。この職業につくためには、工業高校を卒業して、専門学校に入り、国家試験に合格しなければならないそうです。この絵を描いてみて、自分が将来を考えるきっかけになりました。」と書いてあった。さらに、職場体験後の感想文の中には、「大手自動車会社の販売営業所の仕事を体験する中で、新車をデザインする仕事があることを聞きひょっとしたら、自分に向けた仕事なのではないかと思いました。」という一文があった。

以上のことから分かるように、これらの生徒は自分が目指す職業を職場体験する中で、具体的に発見できたものと思われる。職業を実体験させることは、生徒達の職業や仕事に対する知識を広げるだけでなく、自分の将来(進路)に対する考えが、単なる夢物語ではなく具体性を増し、より深く考えるきっかけとなったと考えられる。

また、職業を自ら選択させることは、生徒が真剣に「職場体験」に取り組むため、個々の生徒の主体的な進路選択能力を高めることに有効であることも分かった。

(3) 実践その2 職業人との交流会(第1学年)

ア 目的

- (ア) 複数の講師から興味・関心の高い講師を選ばせ主体性と個性を伸ばす。
- (イ) 会社訪問やインタビュー・交流会を通して社会性を育成する。
- (ウ) 今までの進路学習のまとめとし、これからの指針にする。
- イ 実施計画 (●教師の動き ○生徒の動き)

月	実 践 内 容
1 学 期	<ul style="list-style-type: none"> ○中学生としての出発 (中学生になったの心構) ○学習について考える (学習習慣) ○自己紹介をしよう (自己理解)
夏 休 み	○20年後の自分 (将来の夢) 作文を書く。
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ○職業について考える ●職業人との交流会についての原案検討
10 月	<ul style="list-style-type: none"> ○職業人との交流会の概要説明 ○興味・関心のある職業のアンケート→集計 ●講演会を行う職業人の選択・連絡 ●文化祭への参加形態・取り組みの検討 ●講師に対して文書による講師依頼、交流会の目的の説明と講演内容の説明 ○希望による職業人との交流会の班編成・班ごとに質問項目を整理 ●インタビューに際して礼儀や言葉遣いについて指導 ○講演を行う職業人へのインタビューの実施 (講師との連絡、日程調整) ○インタビューのまとめ (模造紙にまとめて文化祭に展示発表を行う準備) ●当日の流れの再検討 ○職業人との交流会のしおり作成
11 月	<ul style="list-style-type: none"> ○文化祭で展示発表 ○しおりの読み合わせ・講演者の選択の理由や質問のまとめ ●しおりの点検・当日の流れの確認・礼状の作成 ○職業人との交流会分科会の進め方の指導・リハーサル ○職業人との交流会実施・感想文の作成・しおり整理・まとめ ●しおりの点検 ○分科会での報告のまとめ ●職業人との交流会を行っての職業や進路に対する意識の変容を感想文等から探る。 ○文集の作成開始

ウ 実践における具体的な工夫

- (ア) 単独な行事としてではなく、1学期からの進路の取り組みと関連させながら実施した。
- (イ) 文化祭・夏季休業中の課題とも関連を持たせながら実施した。

- (ウ) 広く講師として招き、希望を重視して職業人を選択させ主体性を養うよう工夫した。
- (エ) インタビューを通して直接社会に触れる機会をつくり職業に対する意識を高めた。
- (オ) しおりを読みまとめることで進路学習の理解を深めるとともに、生徒の意識の変容が分かるようにしおりの作成を工夫した。
- (カ) インタビュー・交流会は生徒の主体性を重視して実施した。
- (キ) しおりをまとめたり、交流会の文集を作成する等を通して事後学習にも配慮した。

エ まとめ

しおりの中の感想文に、「多くの先生がこられたので私の目指している職業がありました。交流会に積極的に参加できました。」「仕事をするを簡単に考えていたが、講話を聞き質問する中で厳しさがわかった。」「交流会は面倒くさいと考えていたが、もっとたくさんの先生方の話をきいてみたかった。」があった。これらのことから、次のようなことが考えられる。

- (ア) 複数の講師を招き選択肢を広げたことで、興味・関心の高い講師を選択できた。
- (イ) 選択肢を広げたことで、交流会に取り組む興味・関心を高めることができ、交流会に対して積極的な活動につながった。進路学習への取り組みの意欲が高まった。
- (ウ) 主体性や個性を生かすことによって学習効果を高めることができることが分かった。

(4) 実践その3 職業人との交流会 (第1学年)

ア 目的

生徒にとって身近な職業人の話を直接聞くことで、働くことの意義を考える。

イ 実施計画 (●教師の動き ○生徒の動き)

月	実 施 内 容 (学習の単位)
7月	○「身近な人に聞く仕事」のレポートの方法について先生の話を読み、レポート作成の準備をする。(学級, 個人)
夏休み	○それぞれで身近な人に聞き、レポートを作成する。(個人)
9月	○それぞれが作成したレポートをクラスで発表し、様々な職業があることや、仕事の様子を理解する。(学級) ●講師候補との連絡、選択のための資料作成 ○発表されたレポートの中で詳しく聞いてみたいものを選択する。(個人)
10月	○決定した講師の方の略歴紹介を読み、質問を考える。(班, 個人) ●質問の決定、講師との連絡
11月	○「職業人との交流会」当日 (学年全体) ○学習を終わっての感想をまとめ、クラスで発表する。(個人, 学級)

ウ 実践における具体的な工夫

(ア) 生徒にとって身近な人材の活用

保護者の協力を得て、生徒の学習への興味・関心を高める工夫をした。

(イ) 指導計画に基づいた指導

計画的な指導を行い、夏休みを有効に利用することで、学習を深めるようにした。

(ウ) 個性や適性に応じた学習単位の設定

学習単位を個人、班、学級、学年と設定し、生徒の個性を生かせるよう工夫した。

レポート発表の時は生徒どうしのディスカッションも行った。

(エ) 基礎・基本を押さえた上で生徒の興味・関心を生かす指導

講師の選択にあたって、広く様々な職業があることを視野に入れた上で生徒の興味・関心を生かすためのアンケートを実施した。

アンケートの作成にあたっては本分科会のアンケート結果(P6)をもとにA, B, C, Dの分類からそれぞれ1つ選ばせる方法をとった。この結果をもとにAは編集関係、Bは楽器制作演奏関係、Cは救命救急関係、Dは空港設計関係の4者に講師に依頼した。

(オ) 事前指導の充実と学年行事の一環としての行事の位置づけ

講師決定後生徒に質問用紙を配付し、講師に聞きたいことを記入させた。教師側で整理の上、講師に事前に連絡し講演内容に反映させた。また、交流会を学級委員会の活動の一環として位置づけ、学級委員に司会進行をさせた。

エ まとめ

「これまでの学習と今日の交流会で分かったこと、気づいたこと」をレポートで提出させ学習前と学習後の生徒の意識の変容を調べた。生徒の主な感想は、次のとおりである。

①自分がその仕事を本当に好きでなければいけない。好きだから、こんなに長続きしたと思いました。苦手だったら、こんなに長くは続かない。仕事を決めるときは、心から自分を見つめる必要があると思った。 ②どんな仕事も中学時代の勉強が基礎だと思った。しっかり毎日勉強したい。 ③人間関係が大切だから、友達を大事にする。

これらのことから、次のことが言える。

(ア) 指導のねらいを明確にし指導計画を工夫することで、学習効果が高まる。

指導者が指導のねらいと計画を生徒の実態に合わせて作成し、計画的な指導を展開することで、生徒が無理なく学習に取り組み指導効果が高まった。

(イ) 学習者の意志を尊重した選択の機会を作ることで、学習効果が高まる。

学習者に十分な指導を行い、情報を提供した後で選択の機会を設け、結果を尊重したことが、生徒の意欲を高め積極的な学習を展開することにつながった。

(ウ) 保護者の協力、学年の他の行事との関連を図ることで、学習効果が高まる。

進路指導を学校のみで行おうとせず、保護者の協力を得たことが効果的であった。また学年の他の指導と関連を図りながら展開したことが効果を上げた。

(エ) 体験の場を多く設けることで、学習効果が高まる。

救命救急の講演後に実際に救命救急士の服を着る、楽器製作の講演後に琴や三味線の材料に触る、編集の講演後に本の原稿を見るなど、疑似体験の場をもったことが効果的であった。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

ア 事前指導の充実により、進路に対する興味・関心が増す。

職業調べ・教科の課題・報告会などで、進路に対する意識付けの意味を兼ね、興味・関心を引き出す工夫を行った。事前に、将来どの職業に就きたいか、どの職業に憧れているかという意識調査も実施し、当日に向けての冊子作りや模造紙書きなどで、予備知識の学習を行っていたため、職場体験や職業人との交流会では、生徒の気持ちがすんなりと入ることができた。そのため、面白く聞けたとか、関心を持って参加できたという感想が多く見られ、生徒一人一人の心に残る体験となった。

イ 個性を生かし、主体的に参加することで意欲が向上する。

充実した事前指導を進めていく中にも、意欲が高い生徒ばかりではなかった。そこで、教師側の一方的な与え方やグループ分けではなく、生徒の希望を尊重し、本人の聞きたい職業人・体験したい職場を選ばせ、小グループを編成させた。各グループごとに準備や係分担をした結果、それまで積極性を見せなかった生徒がやる気を出す傾向が現れ、主体的に意見や質問を考え、全体の場で発表することができるようになった。身近にある会社や地域との触れ合いという親近感も手伝って、生徒の個に応じた取り組みが進路学習と新しい自分の発見＝自己理解に対する意欲の向上に役立った。

ウ 興味・関心のある職業人との交流で、望ましい職業観が形成される。

事前の調査で、職業に対する考え方・イメージを漠然と捉えていた生徒も、職業人の話を聞き、意見交換という相互交流を行うことで、仕事の喜び・辛さなど具体的・現実的な知識が増え、職業に対する概念が豊富になった。それによって、将来に向けてこれから何をするのかを考えるきっかけとなり、職業的な自己実現への意欲を高め、望ましい職業観・勤労観を身につける効果があった。また、職場体験においては、実際に体験し、社会人と間近に接することにより、実施前より職業に対する理解と認識が深まったと言える。

エ 事後指導の充実で、主体的に進路を選択する能力が高まる。

実施前の資料づくりと、実施後の感想文・レポートの発表会において共有体験を味わわせることで、将来に対する夢や希望を抱く生徒が、以前より増えた。この取り組みで、進路に対する真剣な姿勢や考え方を持つ力を育て、自分を最も生かしていく道と方法を探求し、主体的に進路を選択する基礎的な能力を高めることができた。実体験と共有体験で学習の定着が図られ、次の指導や取り組みへの移行が、滑らかに続けられたことも一つの収穫であった。

(2) 今後の課題

ア 日常の教育活動に計画的、持続的に指導・助言を与えていく時の、生徒の変容過程の分析と、生徒の意識の変化が分かる調査や評価方法の工夫・開発をさらに推進する。

イ 職業人との交流会では、仕事に関する疑似体験を取り入れる工夫をする。

ウ 学校教育全般の中に創意・工夫をこらし、学校行事との関連について研究をする。

エ 職場開拓をする上で、PTA・地域との連携を日常的に密にする。

オ 指導組織をより一層整備し、継続的・系統的に指導を行い、主体的に自分を見つめ個性を生かした「生き方」を考えさせる進路指導の在り方を探る。

Ⅲ 生活指導分科会の研究

生活指導分科会副主題

自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒の育成

1 副主題設定の理由

これまでの学校教育では、知識の伝達に偏り、知識の量を重視する学力観に立っていたとの指摘がある。これからは、生徒が主体的に生きていくことができる資質や能力、すなわち、自ら考え、判断し、表現したり、行動したりできる能力の育成を目指す、新しい学力観に立った教育指導を展開することが求められている。

今日の中学生の姿には、「夢や希望をもち、それを素直に表現することが少ない」、「様々な活動に臨む姿に意欲が見られない」、「指示を待って行動する傾向が大きい」等々と指摘されることが多い。この要因の一つに、人と人との豊かな触れ合いが少なく、自分のよさや可能性を自覚できないでいる生徒が増えてきていることが考えられる。

上記の問題を解決していく上で必要なことは、次の三点であると思われる。

- (1) 望ましい人間関係を育み、自分自身や他人への信頼感を高めること。
- (2) 自己の理解を深め、自信をもたせること。
- (3) 体験を通して、ものごとを最後まで成し遂げる忍耐力を養うこと。

これらのことから、各教科及び特別活動における様々な体験的な活動の方法を工夫・改善し、人間的な触れ合いを基盤とした教育活動を展開することが大切であると考え、本副主題を設定した。

2 研究の方法

研究実践に当たり、副主題にある「個性」をどうとらえるか、「心豊かに生きる生徒」とはどのような生徒なのかについて、文献研究及び先行研究の調査を実施した。さらに、現在の生徒が日常の生活において、どのように自己を理解しているかについて、実態把握のためのアンケート調査を行った。

次に、副主題にあたるような生徒を育成するための仮説を以下のように設定した。

仮説

各教科及び特別活動における様々な活動を通して、生徒一人一人に自己理解を深めさせ、自己向上への意欲をもたせれば、自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒が育つであろう。

仮説に基づいた実践を行うために、具体的方策について検討を重ねた結果、「生活指導の機能を生かす教科指導の在り方」と「特別活動における工夫・改善」の両面に視点をおいて研究実践を進めることとした。

3 研究の構造

主 題 生徒一人一人の個性・適性を生かし、主体的に生きる力を育てる指導の工夫

副主題 自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒の育成

生徒に見られる課題

- ① 夢や意欲に欠け、達成感を味わうことなく、個性を十分生かしていないように思われる。
- ② 人間関係の希薄化や体験不足から、思いやり・感動・感謝などの、心の豊かさが失われているように思われる。

学校に見られる課題

- ① 教育活動において、人間的な触れ合いが依然として少ない。
- ② 生徒一人一人の立場に立った教育活動が十分行われていない。

研究の課題

めざす生徒像

学校生活で成就感を味わう生徒

- ① 目標を確立し、その達成のための行動を選択し、決定できる生徒
- ② 自分のよさを生かすとともに、他の人を尊重できる生徒

めざす学校像

- ① 人間的な触れ合いを基盤とした教育が展開できる学校
- ② 生徒の個性・適性を的確にとらえ、生かすことのできる学校

研究の仮説

各教科及び特別活動における様々な活動を通して、生徒一人一人に自己理解を深めさせ、自己向上への意欲をもたせれば、自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒が育つであろう。

4 研究の内容

(1) 生徒の実態調査

ア 実態調査のねらい

本調査では、学校生活の中で一人一人の生徒が目標をもち、人間的な触れ合いを通して自己の個性・適性を生かしているか。また、自己の向上への意欲を高めているか等を調査する。

イ 実態調査の主な項目と結果〔対象生徒 1年335名、2年509名、3年296名〕

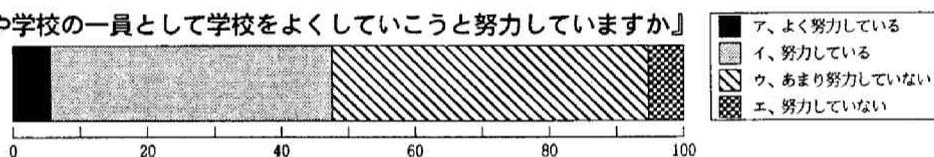
A. 『学校生活の中で目標をもって努力していますか』



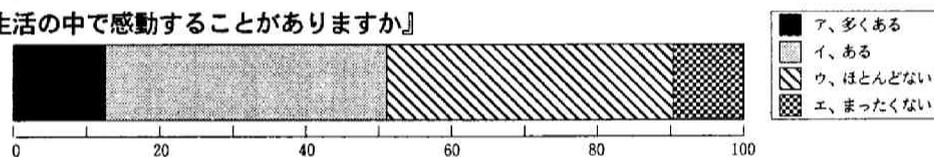
B. 『集団の一員として、役割や責任を自覚していますか』



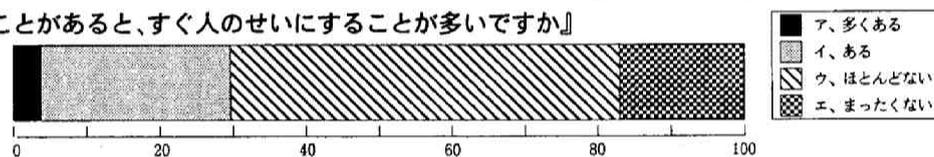
C. 『学級や学校の一員として学校をよくしていこうと努力していますか』



D. 『日常生活の中で感動することがありますか』



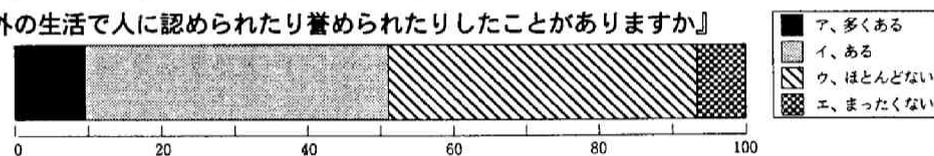
E. 『嫌なことがあると、すぐ人のせいにする人が多いですか』



F. 『自分をよく見つめ、自分のよいところを伸ばそうとしていますか』



G. 『学校外の生活で人に認められたり誉められたりしたことがありますか』



ウ 実態調査の結果の考察

- A、Fから、半数近くの生徒は自己の目標を認識し、それに向かって主体的に考え行動することが依然としてできていない。
- B、C、Gから半数近くの生徒は、集団における自他のよさを発見し、認め合うという意識が少ない。そのため生徒は、個性を十分に生かしているとは言えない。
- D、Eから半数以上の生徒は、感動した経験や人間的な触れ合いが少ない。そのため生徒は心豊かに生活を送っているとは言えない。

(2) 具体的な実践例

ア 教科の学習を通して 一保健体育・器械運動の実践一 A中学校

(ア) ねらい

- ① 生徒相互の話し合いを中心に自己理解を深めさせるとともに、一人一人のよさを伸ばす指導を行う。
- ② 主体的に授業に取り組んでいることを生徒自身に実感させ、達成感や成就感をもたせること。
- ③ 授業で学んだことが学校生活に生かせるようにする。

(イ) 指導の工夫

- ① 意欲的に授業に取り組ませるために、学習カードを作成し、目標を設定させ目標達成に努力させる。
- ② 一人一人の目標にあった場所で、段階的に学習できるようにする。
- ③ 常に新しい技術に挑戦するように努力させる。
- ④ 自分の番がくるまでは、人の技をしっかりと見学し、評価し合うよう指導する。
- ⑤ 練習内容は、生徒に考えさせ、お互いに協力させ、教師は援助・助言の立場とする。

(ウ) 学習の流れ

< 内 容 >

1 時間目～3 時間目 指導計画の説明と体操、グループ作り。

4 時間目～8 時間目 各自、練習計画にそっての練習。

10 分間体操、補強運動、30 分間練習、5 分間整理体操、5 分間反省、学習カード記入。

9 時間目～12 時間目 連続しての技の練習。

次の技に入る時にスムーズにできるようにする。

一つ一つの技がしっかりとできるように完成する。

総合評価。

(エ) 評価の工夫

- ① 生徒に課題を持たせ、段階の工夫によって課題が達成できた喜びを多く味わえるようにする。
- ② 「できる」「できない」がはっきりしてきたり、恐怖心があるため、やさしい技から難しい技へと発展させ常に意欲的に取り組ませる。
- ③ 自分の能力を理解させるとともに他の人のよさを認め授業が楽しくできるようにする。
- ④ 学習・評価カード（次ページ参照を活用することによって、個々の生徒に次への目標をもたせ、意欲的に取り組むようにさせる。

(オ) 生徒の感想（原文のまま）

- ① その時間にやったことや、できなかったことが復習できるところがいい。自分のよかったところや悪かったところ、他人のよかったところがわかるので、いいところをもっと伸ばすようにしたい。
- ② その時間に何をしたかがわかり、記録が残るのでよかった。

- ③ その日、その時の自分の成長が、より多くわかり、できなかった種目に対しての自分の目標を変えずできたのでとてもよかった。
- ④ 毎回自分の目標がもてたのでとてもよかった。そして、それができると、とても心地よい達成感が得られたのでよかった。

学 習 ・ 評 価 カ ー ド

学習カード	__月__日__曜日氏名__	氏 名	グループの人の評価 (どのような点で努力していましたか)
単元			
項目/内容	取り組み(内容)	↑	1. () _____
本時目標		↑	2. () _____
学習内容		↑	3. () _____
評価カード(自己評価)			
1. 本時目標 達成されたか A B C 達成された点 ()			
2. 役割 自分の役割は果たせたか A B C 果たせた点 ()		(ア) 学習カードと評価カードを合併して、 学習・評価カードとして実施する。	
3. 克服度 どこまで克服できたか A B C 克服した点 ()		(イ) 評価カード A された・できた B ふつう C されない・できなかった	
先生の助言		(ウ) グループの人への評価…… 切り取り生徒に渡す。	

(カ) まとめと今後の課題

生徒が、自己を理解し、役割と責任を果たすためには、生徒一人一人に授業における課題を持たせ、「いま、何をしなければならないか」ということを自覚させることによって、意欲的に取り組ませる必要がある。また、生徒一人一人が課題を解決し、他の生徒とともに様々な体験を通し、他の生徒を認め大切にしていくことによって思いやりの心が育つ。このような結果から、生徒にはたえず何事にも興味や関心を持たせる援助・助言が必要であり、何よりも、目標を持たせ体験させることが大切であると感じた。

今後は、授業への意欲的な取り組みの姿勢と体験的な学習が、日常生活においても生かされるようにすることが課題である。

イ 教科の学習を通して 一 国語・ディベートを取り入れた学習活動一 B 中学校

(ア) ねらい

- ① 様々な教材の中から問題点を探し出し討論することで、発見や疑問解明による学習実感を持ち、個の読みを深める。
- ② 根拠に基づいた意見を発表し、互いの意見を述べ合い、また、聞き合う中で異なる考えを理解し合い、視野を広げる。
- ③ 自分の考えを多くの人に認めてもらう努力をすることで、コミュニケーション能力を高め、人間関係の幅を広げる。
- ④ 一定のルールの下で、役割（肯定側・否定側・審査員・司会進行）を明確にし、目標や責任をもって討論に参加することで、達成感を味わい、自他のよさを認識する。

(イ) 指導の工夫

- ① 主体的な理解が深まるように、教材の中から生徒自身に問題点を探させ、それを論題とするディベートを行わせる。
- ② 取り組みへの意欲を高めるために、自他の希望をもとに、役割分担をさせる。
- ③ お互いの立場を理解させるためにも、様々な役割を経験させる。
- ④ 楽しみながら学ぶために、審査によって勝敗を明確に決める。
- ⑤ 視野や人間関係を広げ、多様な意見を引き出すように、論拠の裏付けになるような調査をさせる。

(ウ) 授業の流れ

あらかじめディベートを行うときに心がけるべき留意点をはっきりさせた上で、身近なテーマでディベートを行い、ディベートの目的やそのやり方を理解させておく。

1 時限目 [論題を探し、役割を決定する]

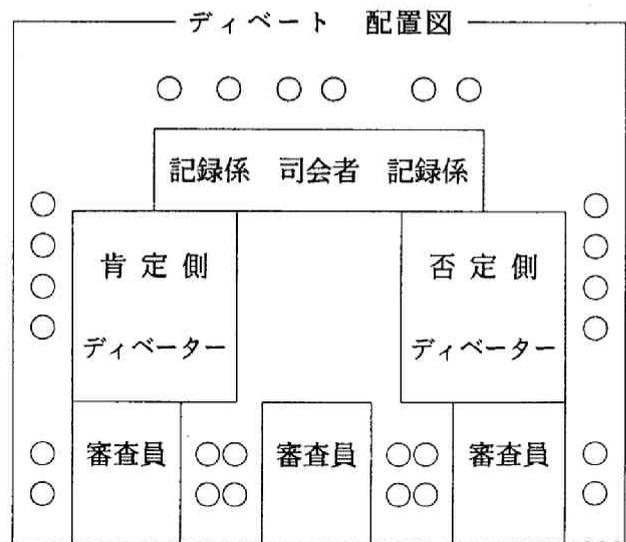
その時点で取り組んでいる教材の中から、ディベートの論題になりそうな問題点を見つける。

(今回は、「論語」の中から正直という事について孔子が述べた内容を取り上げた。) 論題に対して、ディベーター（肯定側・否定側）各 5～6 名、司会 2～3 名 記答録 3～4 名、審査（残った者全員）の各役割を、「希望調査表」を用いて決める。

2 時限目 [立論を考える]

ディベーターは、自分たちの主張の客観的根拠をグループで原稿用紙にまとめ、裏付けとなる資料集めや下調べの分担を決める。

ディベーター以外は、論題に対する自分の意見をまとめる。



3 時限目 [反対尋問の用意]

前時でまとめた双方の立論を全員に配布し、比較検討する。ディベーターは相手の立論についての反対尋問を考える。また、相手の反対尋問を想定して回答を用意する。ディベーター以外は、自分の役割について、心掛けることや、やるべきことを考える。

4 時限目 [ディベート]

司会者の進行で、①立論②反対尋問（作戦タイムを挟んで交互に2回ずつ）③最終弁論④審査の順でディベートを行う。記録係は、討論の内容を記録する。

(イ) 評価の工夫

- ① 自分達の討論を冷静に振り返り、検証するために、後で記録を読み返す。
- ② 発言者一人一人のよさを認めるために、審査用紙に印象に残った人の意見を書かせる。
- ③ 達成度を確認するために、「評価カード」を用いて、その時間の目標を個々に立てさせ、最後に自他の評価をさせる。相互評価の部分は、後で切り離し、相手に渡す。もらった者は、ノートもしくは台紙に貼って保管する。

評価カード

希望調査表 [] 組氏名 []

希望の役割	順位	適任者	理由
司 会			
ディベーター 肯 否			
記 録			
審 査			

月 日 () 年 組氏名
教科 [] 単元 []
本時の目標 []
自分の役割 []
目標が達成された A B C
役割の責任が果たせた A B C
積極的に参加した A B C
自分の良かったところ []
----- キ リ ト ル -----
今日の授業で良かった人 _____
理由 _____

(ロ) まとめと今後の課題

- ① ディベートの準備段階から、生徒が目標に向かって自分達で活動を進めていた。
- ② お互いの発言をしっかり理解しようとする姿勢が顕著に見られた。
- ③ 生徒一人一人が自ら考えて発言する等、主体的な行動が見られた。
- ④ 特定の生徒のみが目立つ傾向があり、審査にまわった生徒は個性を生かしくく、全ての生徒が意欲的に参加したとは言いにくい。
- ⑤ 論題が難しすぎると活発な討論にならないので、取り上げる問題を吟味する必要がある。
- ⑥ 勝敗を争う討論が日本人の感性になじみにくいので、楽しめる工夫が必要である。
- ⑦ 他の教科や領域までディベートを広めることによって、生徒一人一人の個性を大切に生活指導に取り組むことが可能であると思われた。

(ア) ねらい

- ① 合唱祭を通じて自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒の育成を図る。
- ② 学校行事（合唱祭）を実施していく過程で生徒に役割や責任を持たせ、自己のよさに気付かせていくことによって、他を尊重し、自己の個性を生かしていく態度を育成する。

(イ) 指導の工夫

- ① 組織的な行事への取り組みの工夫

次のような組織をつくり、生徒一人一人に自己の役割と責任を自覚させる。



② 合唱祭の目的を理解させ、意欲的取り組みへの動機づけをする。

生徒の対策委員会が、全校生徒に過去の発表のビデオを視聴させたり、意欲的に参加するような呼び掛けを行ったりして、合唱祭の目的を理解させる。

(ウ) 評価の工夫

① 各自がその役割や責任を果たそうと努力しているかを次のような評価カードを使い、生徒に検証させる。その結果を対策委員会に発表させ、反省点を、次の練習に生かすようにさせる。

評価カード 年 組 番 氏名 _____

◎自分の役割や責任をきちんと果たせますか。

② 事後の感想を書かせ、取り組みの過程で困ったこと、つらかったことなどをどのようにして乗り越えられたかを考えさせるとともに、達成感、成就感、満足感が得られたかを検証させる。

	評価	よかった点	悪かった点
(1) 自分の果たす役割を十分に理解しましたか。	A B C		
(2) 役割を果たそうと努力できましたか。	A B C		
(3) 苦手なこと、できなかったことができるようになりましたか。	A B C		
(4) 自分の長所をみんなのために生かすことができましたか。	A B C		
(5) みんなと協力してやろうとしましたか。	A B C		
(6) 自分の果たす役割を十分に理解しましたか。	A B C		

③ 「アンケート」調査……次のような質問を生徒に投げかけ、行事を通じて知ることのできた自分の長所は何だったかを明確にさせる。また、今後それをどのように役立て、伸ばしていったらよいかを考えさせる。

合唱祭の反省

年 組 番 氏名 _____

- <1> あなたは自分の役割や責任をどのように果たしましたか。また、果たそうとどのような努力をしましたか。以前に書いた「役割」「責任」をよく読んで、自分の活動と照らし合わせて記入してみましょう。
- <2> あなたは合唱祭で果たすことができた自分の行動を今後の学校生活にどのように生かしていきますか。具体的に記入して下さい。

(㍑) 生徒の感想と自己評価（原文）

- ① みんなの「和」の中に入れたような気がしました。そして少しだけ団体生活というものがわかってきたような気がします。これからもあと一年、何事にも一生懸命に取り組んでいきたいと思います。
- ② ふざけたり落ち込んでいる人がいたら、声をかけたりしたいと思う。人の役に立つことなら、小さな事でも、実行していこうと思う。
- ③ 自分の考えや言いたいことを今まで以上に人に伝えられたらいいと思います。今回の合唱祭で、友達が私よりもなにげなくみんなに声をかけて、やる気にさせていたので、私も合唱祭だけでなく、他の小さな事でもいいから積極的に取り組んで、みんなのやる気ができるように努力しようと思います。
- ④ 一つの事をみんなで協力して頑張っていけると分かったのだから、これからは大きな行事に限らず、日常生活（班の活動など）でもみんなと協力して、やっていきたいと思う。
- ⑤ みんなと協力することも私の役割の一つだと思います。それができたので、これからもいろんなことがあると思うがみんなと協力し、自分もいろんなことに努力していきたいと思います。
- ⑥ 「だめだ」と思わずに、最後までみんなと一生懸命やったから自分の行動にも「自信」を持つ。

(㍒) まとめと今後の課題

今回は合唱祭という一つの行事に焦点を絞り、役割を考えさせ、その役割に対して責任を持たせていく指導を行った。その中では生徒の反省、自己評価に表れているように一定の成果があったと判断できるのではないだろうか。ただ頑張ったとか、楽しかっただけでなく自己の学級内での役割を認識し、その実行に努めた生徒が多く、合唱祭を通じて充実感や満足感をもって終わることができた。協力することの大切さやその難しさについて子供たちは多くのことを学び合うことができたように思う。特に、途中で何回か自己の役割を実行しているかを検証するために書かせたアンケートと、それに対する今後の活動を考えさせたことは、効果的だった。

生徒の反省にあるように、生徒は行事のあとも学校生活の別の方面で一生懸命に取り組みたい、頑張っていきたいなどと意欲と主体性を示すようになった。しかし、平常の学校生活の中において、他を尊重し、自己の個性を生かしていこうとする態度の伸長を図る実践的な方策を研究し学級運営に生かしていくことは、今後の課題であるといえよう。

5 研究のまとめと今後の課題

生活指導分科会では、教育課題の研究主題に基づき、教育への今日的課題や生徒の姿から、副主題を「自己の個性を生かし、心豊かに生きる生徒の育成」と設定し、生徒の実態調査を行い、仮説を設定した。その仮説をもとに、各教科及び特別活動の二つの分野で、生徒一人一人に体験的な活動を通して、自己理解を深めさせ、自己向上への意欲をもたせるため、教師が生徒の活動目標の決定や課題・役割の選択を援助する実践と指導の工夫をすることで、副主題の具現化を図った。

その実践研究の成果として、次のことが挙げられる。

生徒は、自己の目標を明確にして活動に取り組むことによって、生き生きと目標を目指して行動し、意欲的に問題解決を図るようになった。その結果、新たな問題に対しても積極的な姿勢をもち続ける生徒が増えてきた。さらに、集団の中で自己のよさを生かすにはどのようにしたらよいか、どのような役割を果たせばよいか、ということを考えて行動する姿が多く見られるようになった。その行動の中で、自分がどのように他に役立ったかということも自覚できるようになってきた。つまり、このことは自己評価の力が高まってきたのであり、そのことが、自分の力はどのようなものかという、自己理解を深めることにつながったともいえる。生徒間でも、積極的な意見交換が見られるようになり、他者の言葉に耳を傾け、自らをよりよくしようという意欲も見られるようになった。さらに、教師の適切な助言や援助が、生徒の活動の質を高めるために重要であることも分かった。

この研究実践を通して、めざす生徒像である①「目標を確立し、その達成のための行動を選択し、決定できる生徒」②「自分の良さを生かすとともに、他の人を尊重できる生徒」の姿が見られるようになってきたとともに、めざす学校像である①「人間的な触れ合いを基盤とした教育ができる学校」②「生徒の個性・適性を的確にとらえ、生かすことのできる学校」にも近づいてきたと思えるのである。

今後の課題としては、次の五点が挙げられる。

- (1) 心豊かに生きる生徒の育成をめざし、どの実践においても評価カードを使用したのが、さらに工夫・改善をする必要がある。
- (2) 教科の学習を通じた実践では、教科の達成目標と生活指導のねらいとの関連をどう図っていくかが課題となる。
- (3) 生徒を主体とした授業において、教師がどのような場面で援助や助言をしたらよいかを的確につかむ必要がある。
- (4) 生徒の興味・関心と、具体的な生徒の活動場面をどのように結び付けたらよいか工夫する必要がある。
- (5) 教科や特別活動を問わず、どの活動場面でも自己を生かせる生徒を育成するための指導の工夫が必要である。

これらの事柄については、今後とも実践を通して研究を積み重ね、指導方法等の工夫・改善を図っていきたい。